

ていることが想像されるのである。

(採卵会の成果) フジミドリシジミ	5 卵
アイノミドリシジミ	15 卵
ジョウザンミドリシジミ	150 卵
エゾミドリシジミ	55 卵

(TAKAYUKI NIGAKI) 〒671-15 姫路市

安富町大河弁獄 7 月上旬の蝶

広 畑 政 己

大河弁獄は安富町関の西方に位置し、林田川に注ぐ支流の源にある。すぐとなりの雪彦山については言うまでもなく、ウスバシロチョウ、スギタニルリシジミなどの産地として古くから親しまれ、蝶類の調査も行き届いている。しかし山一つ隔てたこの溪谷へは採集者も少なく、これまで一編の報告もされていない。

筆者がこの溪谷を訪れたのは、ウラジロガシが自生しているという事実から、ヒサマツミドリシジミが棲息しているのではないかという憶測があったに他ならない。

標高200m～600mの溪谷には、ウラジロガシの他に、シラカシ、アラカシ、ケンボナシ、アカシデ、サワシバ、ケヤキ、カナクギノキ、ネムノキ、トネリコ、カラスザンショウ、ヤマザクラなどの樹木が繁茂し、景観美を成している。

この溪谷へは過去2度足を運んだが、いずれも冬期の調査で、夏のシーズンはこの度が初めてである。過去2度の冬期の調査では、メスアカミドリシジミの採卵という幸運に恵まれたが、念願のヒサマツミドリシジミの発見にまでは至らず、今回の調査でもウラジロガシが多い対岸の急斜面に入れず、前回と同じ結果に終わった。県下瀬戸内側からもヒサマツミドリシジミが発見されており、この地での発見を期したい。この度の調査で採集及び目撃した種を次の通り報告する。

採集及び目撃年月日……1978年7月8日

シジミチョウ科

ツバメシジミ、ウラキンシジミ、ムラサキシジミ

セセリチョウ科

シロチョウ科

ヘリグロチャバネセセリ

キチョウ

ジャノメチョウ科

ヒメウラナミジャノメ

タテハチョウ科

イチモンジチョウ、サカハチチョウ、コミスジ。

キリシマミドリシジミの飼育について

佐々木 薫

1. はじめに

当時小学二年生で大の虫好きだった長女と連れ立って春の三濃山へ昆虫採集に出かけ、初めてネットに入ったカラスアゲハの羽化直後の個体を手にした私は、その美しさの捕虜になり今年で6年目を迎えた蝶の愛好者です。

当初は成虫採集だけに熱中していた私も、ヒサマツミドリシジミとか、キリシマミドリシジミの類を採集する事の困難さを知り、3年前から飼育を始め、去年はヒサマツミドリシジミの飼育に成功したので、今年はキリシマミドリシジミの飼育を試みたところ、フ化率85%強という良い結果が得られた。これまで先輩諸氏が、数多く試みられ、フ化率の悪いことで定評のあるこの種だけに(同じ同好会蝶友の数名が私と同じ程度の卵を同じ時に採集し飼育したが、私以外の全員が失敗に終わったことから)是非今回の同好会誌発行にその経験談をという事から素人のまぐれ談を書く事になりました。専門的知識の無い小生のこと、そこは自己流の表現で卵採集より羽化迄の過程を書く事にしましたのでグラフと一諸に見て頂き、少しでも参考になれば幸いです。

2. 飼育に先だって

(1)卵採集の前に食樹のアラカシを一週間々隔位で取って来て廊下の中で瓶に挿し、野外より早く発芽させ、もし自然のアラカシやアカガシが芽を出す前にフ化した場合に備えて置きたい。

(2)卵の採集には53年4月1日に出かけて164卵採集することが出来た。

(3)小生は過去2年の経験から、卵の保存方法については早くから卵を採集して冷蔵庫で保存して来ましたが、どうもフ化率が良くないのではないかと思い、キリシマミドリシジミについては卵の採集期を友人と話し合って遅くし、冷蔵庫には入れないで、採集した卵はそのままタッパの底にティッシュペーパーを敷き、霧吹きで僅かに湿った程度にし、その上へ新芽のついたままの卵を置き、タッパの蓋を締め、室内(廊下)で保存した。廊下の中は午前中2～3時間程度は太陽が当たって、かなり暖かくなっている。

(4)タッパ1個には約20～30卵程度にしてあまり多くの卵を入れず、毎日必ず幼虫がフ化していないかを確認する作業をし易くしたい。

3. 幼虫の管理について

(1)タッパ内の卵は一つ一つ毎日必ずルーペで確認し、フ化した幼虫はシャーレに移す作業を忘れないようにする。

(2)シャーレ内に入れる食樹の葉は新芽が開き始める前の状態が良く、その茎に綿を巻き水で湿気をもたすと長持ちする。

その際あまり水分を多くするとシャーレ内の湿度が高くなり過ぎ、幼虫が死ぬ原因になりますので注意して下さい。

(3)シャーレの中は常に清潔にしていきたい。特に食樹の新芽内に幼虫が糞をし湿気を帯びる状態は幼虫が死ぬ第一の原因になりますので充分注意して下さい。

(4)食樹の新芽は常に新鮮なものを与えてやって下さい。その際幼虫を移す方法ですが筆の先端で移してやると幼虫を痛めなくて良い。

(5)飼育の場合最も良い方法は、やはり自然の状態に近くしてやることだと思いますので、幼虫が3令近くなり、食樹の葉が開ききった状態のものを良く食べ出した頃にはシャーレから出してやり、食樹を瓶に挿した状態で飼育をしてやります。

特に5月の中旬頃になりますと気温が相当高くなりますので、タッパとかシャーレのような容器で飼育することは幼虫を殺す率が非常に高くなって来ますので、まだ幼虫が小さくても早い目に外に出してやり、良い環境で飼育してやるのが大切です。

(6)瓶に挿して飼育する場合の注意ですが、瓶の中に幼虫が落ちて死ぬことが多いので、出来ればワンガッブ大関の空瓶のような蓋付きの物にして蓋の切口には更に綿を水で湿めらせ切口を塞ぐように細かい注意がほしい。

(7)飼育の場合でも一日に2～3時間は陽が当たる場所を選びたい。

(8)終令に近くなった幼虫は、蛹化場所を捜すため、うろうろして食樹を離れ始めますので、この時期に行方不明になる幼虫が多くなりますので、小生の場合は透明の大きな瓶の中に食樹の小さな枝を切って挿し、蓋はガーゼで塞ぎ飼育してやりますと、食樹の枝とか、瓶に蛹化しますので、それを取外して羽化の準備にかかってやる。

4. 羽 化

(1)シジミ類の場合は特に羽化し、翅がしっかりしてきて明かりが射している場所ですとすぐ飛び始め、翅が破損し易いため、光の入らない箱の中に蛹を入れ羽化させて下さい。

(2)完全に羽化し終えても翅がしっかりするまでは、三角紙には取込まないようにして下さい。

5. フ化、蛹化、羽化の結果

(1)フ 化 率

採卵総数 164卵、フ化総数 140卵、フ化率85.36%

(2)蛹 化 率

2令幼虫期に蝶友へ32頭譲渡す。

フ化総数ー譲渡数=108頭、蛹化総数81頭蛹化率75%

(3)羽 化 率

羽化総数80頭、蛹化総数に対して約99%

フ化総数に対して約74% 32頭差引く

採卵総数に対して約61% 32頭差引く

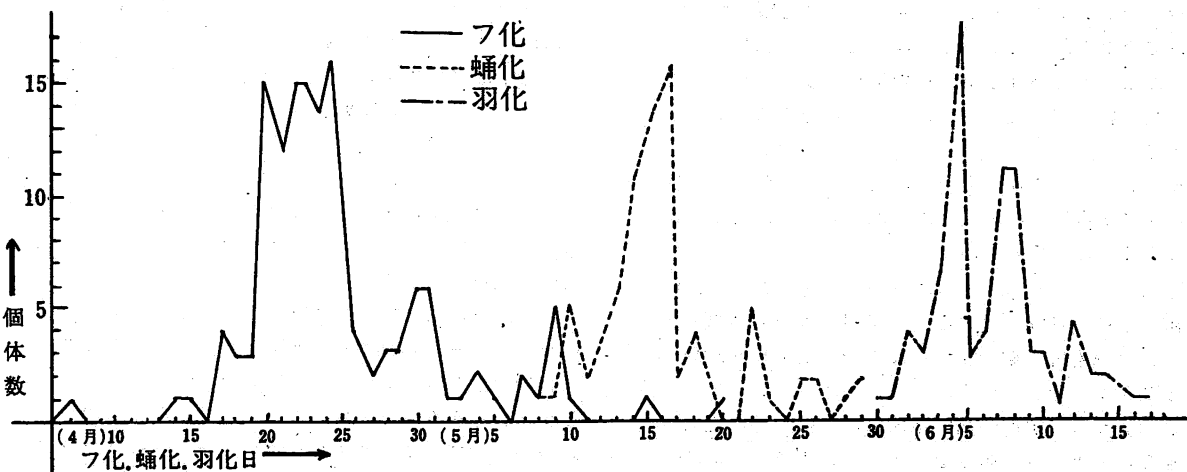


表. フ化より羽化迄の経過

6. 図の説明

飼育を始める前の蝶友や先輩の談では、キリシマミドリシジミはフ化から羽化迄の過程が全ったくだらだと山谷のない状態が続くように聞かされていましたが、フ化、蛹化、羽化の各状況共に表を見て頂ければ良く分るように5日～6日の大きな山を中心に放物線に似た状況を描いていることから、やはり冷蔵庫が原因してただなら状態のフ化因を作るのではないと思われる。

(KAORU SASAKI) 〒678 相生市

12月に見かけた蝶数種について

広畑政己

30年以上に1回起こるような気象現象を異常気象と言うようであるが、今冬(1978～1979年)はまさしくこの異常気象である。朝日新聞(1978年2月23日)によると、今冬(12月～2月14日)の西日本の平均気温は7.2℃で、明治28年以來の平均気温(5.3℃)より1.9℃高く、气象台始まって以來の暖冬となっている。

因みに、姫路市に於ける12月1日～12月17日までの気温を見ると、平均気温8.2℃、最高平均気温14.3℃、最低平均気温2.6℃と高く、この現象は秋から続いている。

この異常気象にリズムを乱されたのか、12月16日に姫路市新畑にてウラナミシジミ2♀を目撃、また12月17日には姫路市打越にてモンシロチョウ1頭とモンキチョウ1頭を目撃した。

ウラナミシジミはインゲンマメ等が11月頃まで栽培されていた上に、暖かい日が続いたので、12月にも発生したものと思われるが、その後0℃以下の日も増え、マメ科食物の花も見られないことから越冬はしないものと考ええる。

モンシロチョウは通常蛹で越冬しているが、この場合は越冬するはずの蛹(休眠の浅い蛹)が、高温によって羽化したものと思われる。

この度目撃したもう1種のモンキチョウについては、川副、若林(1976)によると、本州では中令幼虫で越冬し、九州南部、南西諸島では冬でも成虫や卵が見られることが記されている。

このように、温度が高い地域に於ては、特に定まった越冬形態というものはないようで、姫路市に於ても今年は前述した通りの暖冬で、通常ならば越冬する幼虫が、11月下旬～12月上旬に蛹化し、12月に羽化した

ものと思われる。ともかく前記3種についても、兵庫県下に於ける発生の遅い記録として報告する。

参考文献

川副昭人・若林守男(1976)原色日本蝶類図鑑、
保育社(大阪)

ヤナギを食べたモンキアゲハ

佐々木薫

1977年の6月、庭に鉢植していたカラスザンショウに、モンキアゲハが盛んに産卵しているのを目撃した。

このモンキアゲハは聊かあわて屋さんで、最初は食樹の葉に産卵していたが、そのうち食樹の幹や植木鉢にまで産卵し、果てには私が池の中に、木箱に土を入れ植えていたヤナギにまで2卵産み付けて行った。

その時私は、まさかモンキアゲハがヤナギを食べるとは思ってもいなかったし、異常産卵でおろうとそのことはすっかり忘れていた。

ところが7月の或夕方のこと、庭木に水をやっていた私は、ふとヤナギの葉に蝶の幼虫がいることに気がつき、よく見るとモンキアゲハの3令幼虫が2頭ヤナギを食べて元気に育っているではありませんか。

私は早速このことを蝶友に伝えたところ、皆は一様にこの珍事にびっくりし、私も是非羽化するまで突き止めたいと毎日幼虫の生長を楽しみにしていた。

ところが或日のこと、ヤナギの地面近くの葉に降りていた幼虫が、カエルに食べられ、3令まで生育したものの、この年は念願の羽化までには至らなかった。

1978年は庭を訪れるモンキアゲハも少なく、他からモンキアゲハの雌を採集して来て、カラスザンショウで採卵し、瓶挿しのヤナギで飼育した。

8月29日にフ化した幼虫は、体長が約3.5%であったが、翌日には4.5%になり、ヤナギの葉を2%角位づつ食べては次に移り、一枚の葉に大体4ヶ所から6ヶ所位の食痕を残していた。

8月31日には6%に、9月1日には7%に成長していたが、1日留守をすることがあり、その間の食樹の管理が悪かったためか幼虫は残念ながら全部死んでしまい、今年も羽化を見ることができなかったが、これらの実験で、モンキアゲハがヤナギの1種(コリヤナギと思われる)を食べることだけは実証できたので報告しておきます。